インド思想史学会　　第31回学術大会

（対面・オンライン併用）

プログラムと発表要旨

Association for the Study of the History of Indian Thought
The 31th Annual Conference (Face-to-face & Online)
11 Jan 2025 (Sat.)
Programme and Abstracts of Papers

開催日：2025 年 1 月 11 日（土）

会 場：　京都大学 文学部校舎2階第7講義室

京都市左京区吉田本町　京都大学大学院文学研究科・文学部
https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/

連絡先：〒 606-8501
京都市左京区吉田本町 京都大学文学研究科インド古典学研究室気付インド思想史学会事務局
TEL: 075-753-2460（横地）
E-mail: hit_office@googlegroups.com
Website: https://indosg.org/

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない場合は、メールアドレスが未登録ですので事務局までお知らせください。

インド思想史学会　第 31 回（2024 年度）学術大会のご案内

インド思想史学会会長　　赤松明彦

インド思想史学会第 31 回学術大会を下記の通り開催いたします。皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

記

開催日　　2025 年 1 月 11 日（土）

対面による現地開催を主とし、オンライン（Zoom）を併用します。オンライン参加者は、事前の参加申込が必要です。申込方法はメール連絡または学会ウェブサイトを参照ください。

会　場　　京都大学文学部校舎2階第7講義室
（理事会　11:00 – 11:30　　京都大学文学部校舎2階第7演習室）

参加受付　12:30 から　京都大学文学部校舎2階第7講義室前
参加費：1,000 円　　懇親会費：一般 5,000円、学生 3,000円（当日受付）

※　オンラインは会員・非会員とも参加無料。12:30からZoomを開場。早めに入場ください。

研究発表者および発表題目

13:00 – 13:50　　Efraín Villamor Herrero （帝京大学助教）
"The Significance of War Allegories in the Pāli Canon
— The Appropriation of the Indra Archetype and the Terms for Conquerring the Warrior Context —"

13:50 – 14:40　　坪田 さより （東北大学大学院文学研究科特任研究員／日本学術振興会特別研究員PD）
「*praty-ava-roh/ruh* 用例研究：天界からの『戻り降り』」

~~~~~ 休憩 ~~~~~

15:10 – 16:00　　大木 舞 （京都大学大学院文学研究科人文学連携研究者）
「サンスクリット文献におけるヴィシュヌの顕現・化身の組み合わせについて」

16:00 – 16:50　　川村 悠人 （広島大学大学院人間社会科学研究科准教授）
「古典サンスクリット詩における文法用語比喩」

総　会　　17:00 – 17:30　　引き続き同会場（第7講義室）、同URL（Zoom）で

懇親会　　18:00 – 20:00　　カフェレストラン「カンフォーラ」（京大正門横）にて

※ 当日は法蔵館による書籍展示販売あり（文学部校舎2階第6演習室にて）
~~~~~

Association for the Study of the History of Indian Thought
Programme of the 31th Annual Conference

AKAMATSU, Akihiko President

The 31th annual conference of the Association is to be held as follows. We will cordially invite you to the conference.

Date and Time: 11 Jan 2025 (Sat.), from 13:00

Board Meeting: 11:00 — 11:30（Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Seminar room 7）

Method: Face-to-face meeting/Online meeting by Zoom
（Those who wish to participate online are asked to pre-register.
For registration, please consult the follow-up email or our website.
The conference room and Zoom meeting are open from 12:30）

Venue: Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Lecture room 7

Programme

13:00 — 13:50 Efraín Villamor Herrero (Assistant Professor, Teikyo University)
"The Significance of War Allegories in the Pāli Canon — The Appropriation of the Indra Archetype and the Terms for Conquering the Warrior Context—"
[in English]

13:50 — 14:40 TSUBOTA Sayori (Research Fellow, Graduate School of Letters, Tohoku University / JSPS PD Research Fellow)
"*praty-ava-roh/ruh* in the Veda: descending back from the heavenly world"
[in Japanese]

~~~~~ Break ~~~~~

15:10 — 16:00 OKI Mi (Post-Doctoral Researcher, Graduate School of Letters, Kyoto University)
"Combinations of Viṣṇu's Manifestations in Sanskrit Literature"
[in Japanese]

16:00 — 16:50 KAWAMURA Yuto (Associate Professor, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)
"Grammatical Similes in Classical Sanskrit Poetry"
[in Japanese]

Plenary Meeting 17:00 — 17:30 (Continued in the same room/Zoom meeting)

Banquet 18:00 — 20:00 (Café Restaurant Camphora)

※ There will be a book exhibition and sale conducted by the Hozokan publisher at Kyoto University, Faculty of Letters Building, 2nd Floor, Seminar room 6.
~~~~~

The Significance of War Allegories in the Pāli Canon

— The Appropriation of the Indra Archetype and the Terms for Con quering the Warrior Context —

Efraín Villamor Herrero

(Assistant Professor, Teikyo University)

Previous scholarship has approached the Buddhist perspective on war and peace in early Buddhism (Hosoda, 2024; Schmithausen, 1999, 2014; Tada, 2023). These studies have provided insights into Buddhist attitudes towards war and have mainly analyzed the historical context of allusions and terms related to warfare at the time. It is not difficult to see that the Buddha's teachings do not encourage fighting anyone other than oneself, and why the most widespread practice implicit in warfare, killing, is rejected as a primary ethical rule among Buddhists (Schmithausen, 1999: 45). We know that a significant number of followers from the warrior 'caste' converted to Buddhism and that they became its largest exponential followers early on (Norman, 1995: 110). The Buddha seems to have persuaded Brahmins by referring to their religious context (Gombrich, 2018; Shults, 2014). However, the details of whether warriors were persuaded by argument and why they converted to Buddhism are not well documented. Therefore, this study analyses the numerous metaphors in the Canon that refer to a war context, which have not received the same interest from previous scholars. In the Canon, those who have achieved liberation are regarded with various titles that refer to them as the aspiring figure of a conquering warrior (*vīra vijitasaṅgāma* DN 14.12; MN 26.1; SN 6.1, SN 11.17). In addition, there are passages referring to the Buddha as the iconic saint (*muni*) and hero (*vīra*) (SN 578), the great hero (*mahāvīra*) of great wisdom (*mahāpaññā*), fearless of any kind of fear or hatred (sabbaverabhayātīta) (SN 4.23); and ascetic practitioners metaphorically defined as warriors (*yodhājīvo* AN 3.133, AN 4.181). The Buddha's encouragement to his followers to be heroes (*sūrā vijitasaṅgāmā*) (Tha 228), who rise to win the spiritual 'battle' (*uṭṭhehi vīra vijitasaṅgāma*) (DN 14.12, MN 26.1, 85.1, SN 6.1, 11.17), and to overcome the most difficult one (*saṅgāmaṁ jeti dujjayaṁ* SN 7.3; Tha 442), represents the use of references to the war context (*yuddha/saṅgāma*), for ascetic purposes. Thus, the present study focuses on the relationship between war allegories and references to warfare in the Nikāyas, considering their implications for the conquest of the warrior archetype of Indra and the integration of warrior ideals into Buddhist concerns.

praty-ava-roh/ruh 用例研究：天界からの「戻り降り」

坪田 さより

（東北大学大学院文学研究科特任研究員／日本学術振興会特別研究員 PD）

動詞 *praty-ava-roh/ruh* には、*prati* の二つの意味「向かって、対して」と「元通りに」に対応して二通りの用法 (a)「対面して降りる」と (b)「戻り降りる」が見られる。

用法(a)は、より具体的には「（人など：accusative）に対面して、（敬意や畏怖などを表して）降りる」というものである。この用法が明確に表れる例は、「優れたものに対して劣ったものが降りる」という一般的な慣習への言及である：TS 7.5.4.1^{p} [Sattra]; ŚB 3.9.3.7 [Soma] など。特に、祭主の行動を規定する例が多く見られる。

用法(b)には、基本的意味として「（ある場所から：ablative）降りて（もとの場所へ：acc.）戻る」というものがある。これが明確に現れる例は、神学議論における「（擬似的・儀礼的に）天界（あるいは、神々の世界、諸世界）に到達したのち、そこから降りて地上へ戻る」という文脈、儀礼中の具体的な祭式手順に係る「戦車・祭柱などから降りて（地上に）戻る」などの文脈（主に Śrautasūtra）に見られる。

用法(b)のうち「（儀礼的に）天界（あるいは、神々の世界、諸世界）から地上へ戻り降りる」という文脈は、TS^{p}において初めて現れる：TS 1.7.6.2^{p} ; TS 3.3.6.2^{p}; TS 7.3.10.4^{p} (2x); TS 7.5.4.1^{p}; TS 7.3.5.3^{p}; TS 7.3.7.4^{p}; TS 7.3.9.3^{p}; TS 7.4.2.5^{p}; TS 7.4.4.3^{p}. また、TS^{p}以降の文献には、祭主が祭式行為によって天界に到達した後、地上へ戻らなければ、破滅的状況に陥るかもしれないという恐れを示し、その予防として祭式行為を推奨する議論が登場する：TS 7.3.10.3–5^{p}; AB 4.21; JB 2.337 など。このような文脈・議論においては、「天界に行ったきりで戻らないこと」は忌避されるべき状況であり、「天界から地上へ戻ること」が望ましいとされる。

一方で、用法(b)の中には、望ましくない文脈での「戻り降り」も存在する。これは、「より望ましい場所・ステータスから降りて、もとの場所・ステータスに戻ってしまう」というものである：KS 8.4:87,3^{p}（Asura たちが栄華［*śrī-*］に到達したのちに）; TS 5.6.9.1^{p}（*savá-*から）; ŚB 12.4.2.7（天界［*svargá- loká-*］から）など。

一般に、天界から地上への帰還については、天界での死（地上での再生=「再死」）に関する議論が知られている。しかし、*praty-ava-roh/ruh* の用例においては、基本的に、再死とは異なる、儀礼内での象徴上の天界・地上間の移動が問題となっている。*praty-ava-roh/ruh* の用例の分布からは、儀礼内での天界からの「戻り降り」という考え方が、TS^{p}に始まり後代の文献に波及した可能性が考えられる。

本発表では、以上のような Veda 文献における *praty-ava-roh/ruh* の全用例の整理・検討を行ない、それに基づき、「天界から地上へ戻り降りる」という考え方について、その内容と発展段階の一端を明らかにしたい。

サンスクリット文献におけるヴィシュヌの顕現・化身の組み合わせについて

大木 舞

（京都大学大学院文学研究科人文学連携研究者）

本発表は、ヒンドゥー教の一神格であるヴィシュヌの顕現・化身の列挙、すなわち一つの組み合わせとしての顕現・化身のリストの変遷を追うことを目的とする。具体的には、*Harivaṃśa*等の叙事詩文献や*Matsyapurāṇa*等のプラーナ文献群、より後代に成立した*Gītagovinda*等の美文学作品を渉猟し、化身の形成期から発展・受容期にかけてのその列挙に関する記述を時系列に沿って並べ、歴史的な変遷を分析する。これにより、ヴィシュヌの顕現・化身概念の形成に関する Hacker[1960]や、叙事詩を中心に初期の顕現・化身の列挙を取り扱ったBrinkhaus [1993][2001] の先行研究に対して、その形成期に次ぐ発展・受容期を示す一資料を提供し得ると考える。従来の研究では重点的に扱われなかった、プラーナ文献群の中では編纂年代が古いと考えられている*Mārkaṇḍeyapurāṇa*や*Viṣṇupurāṇa*に加えて、Pāñcarātra派の文献や碑刻文資料、美文学作品などを新たに扱うことにより、サンスクリット文献におけるヴィシュヌの化身の列挙がどのように発展していったかという傾向を浮かび上がらせることを目指す。特に、典型的な十化身、すなわち魚（Matsya）、亀（Kūrma）、猪（Varāha）、人獅子（Narasiṃha）、小人（Vāmana）、Paraśurāma、Rāma、Kṛṣṇaまたは Balarāma、仏陀、Kalki(n)の組み合わせがどの時点から出現するのかという点に着目したい。

古典サンスクリット詩における文法用語比喩

川村 悠人

（広島大学大学院人間社会科学研究科准教授）

およそ文学というものを特徴づける大きな要素の一つとして比喩表現というものがある。比喩表現を通じて、何らかの事象を見事に言い表したり、聞き手ないし読み手の意表をついたりすることは、詩人たちが用いる技巧の代表格である。インド古典文学にも実に豊かな比喩表現が観察される。

比喩表現の研究は、文学上の語り方の一つを教えてくれる点で文学の形式について思索するのに役立ち、また、その国の文化を理解することにも直結する。文学では、何を語るかではなくどのように語るかが重要であり、主題自体は使い古されたものだったとしても、それを新しい仕方で語り直せば、新たな芸術として成立する。「雨が降っている」という事実があったとして、それをどのように語るかが詩人たちの腕の見せ所であり、またそこに当該の文学がもつ特徴が現れる。そのような語り直しの際、有効に活用される技巧の一つが比喩表現である。もちろん、その比喩表現を形式的に理解するだけでは、文学研究として十分とは言えない。何かが何かに比喩されるとき、なぜそのような比喩が成り立つのか、背後にどのような発想があるのかを検討する必要があり、背後にある発想を知って初めて、特定の語り口がもっている意味合いや妙味を掴みとることができる。

サンスクリット文学における比喩表現の研究には、国内外で一定の蓄積がある。Gonda 1949は、ヴェーダ文献を含むサンスクリット文献全般を対象とした包括的な比喩研究である。二大叙事詩については、『マハーバーラタ』（*Mahābhārata*）の比喩表現を網羅的に収集して分析するSharma 1988や、比喩表現を含め『ラーマーヤナ』（*Rāmāyaṇa*）に見える詩的技巧を広範囲に扱うBrockington 1977、古典詩ではアシュヴァゴーシャ（1世紀～2世紀頃）の『端正なナンダ』（*Saundarananda*）に見られる比喩表現をいくつかの主題 に分けて考察するCovill 2009や、カーリダーサ（4世紀～5世紀頃）の『クマーラの誕生』（*Kumārasambhava*）と『ラグ家の系譜』（*Raghuvaṃśa*）における比喩表現を検討するJackmuth 2002などが、代表的な研究と思われる。本邦においては原 1964がバーサ（4世紀頃）の戯曲類に見られる月の比喩を集めており、近年では山崎一穂が仏教美文学における比喩表現について主に詩学の立場から精力的な研究を展開している。

本発表は、古典サンスクリット詩に見出される比喩表現の事例研究であり、先行研究では詳論されていない――しかし、インド文化を考える上では重要である――主題に注目するものである。それは、パーニニ文法学の用語を用いた比喩表現である。それら文法用語比喩を収集、分析して、その内実を詳らかにするのが本発表の目的である。たとえばカーリダーサは、『ラグ家の系譜』においてラーマとシーターの結婚を接辞（*pratyaya* 男性名詞）と語基（*prakṛti* 女性名詞）の結合に比喩している。この比喩表現は、接辞と語基は決して離れて現れることがないこと、また接辞と語基は二つで一つとなって事をなすことといった、パーニニ文法学が前提とする観念を念頭においたものと考えることができ、ラーマとシーターの結びつきのあり方を新しい形で表現したものとなっている。

この種の比喩表現は、文法学が圧倒的な地位と認知度の高さを誇っていたサンスクリット文化を背景にもつものとして、古典サンスクリット詩に特徴的なものと言える。文法学用語を使った比喩表現は、当時の人々にとって格式高く、かつ極めて身近に感じられるものだったと考えられる。

加えて、サンスクリット詩人たちがなす文法用語比喩の研究は、彼ら詩人たちがパーニニ文法学をどれほどの水準で学んでいたかという問題についても示唆に富む資料を提供する点で、一定の価値を有するものである。